

保育者養成における教授法について
——保育者養成校の造形に関する
文献調査を通して——

About Teaching Methods in Childcare Worker Training
: Through a Literature Search on Modeling Class in
Childcare Training Schools

大塚 貴之
Takayuki Otsuka

はじめに

幼稚園教育要領の「表現」は 2017（平成 29）年 3 月に改定されており、造形表現（活動・遊び）においては、ねらいとして（1）いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。（2）感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。（3）生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ¹⁾。と示されており、保育所保育指針においても幼稚園教育要領との整合性が図られている。それに加え“③生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなど気づいたり、感じたりして楽しむ”²⁾。といったように五感や感性に関し幼児の指導方針についても具体的に示している。

これらの発達を促す活動のひとつとして造形表現（活動・遊び）が幼児にとって重要であることはいうまでもない。保育現場においても造形表現（活動・遊び）に設けられている時間も多く³⁾ 指導する内容は、発達段階に合わせて実施されることが一般的である。その際に活用される手法は様々なものがあり例えばモダンテクニック・オートマティスムなどの手法が、教材として採用されている⁴⁾。しかし保育現場ではモダンテクニックの種類について知っているが実践を行った経験がないこと⁵⁾も指摘されており、保育者養成校で学んだことが保育現場で有効活用されない場合があるとし、保育者養成校の授業実践方法に一層の創意工夫が求められている。他にも、幼児期も

児童期も教員の多くが苦手意識をもって造形表現（活動・遊び）を行っていることも明らか⁶⁾となっており、佐善⁷⁾は、今までの学校での美術・図画工作において創造の喜びや作品制作の充実感を感じることがなかった学生が半数以上いたことを明らかにした。また、保育現場で期待される幼児の新奇なものに触れた時の感動や興味・関心を誘発できるような体験を保育者養成校において学生自信が体験できていないことが指摘されている。これに伴い、子どもたちの表現力の低下を懸念する声もあがっている⁸⁾。

幼児に対し、単に手法・技法を活用した造形活動を展開するだけでは、本来期待される新奇な体験や感動から遠ざかり、造形や芸術を楽しく感じたり得意になったりする機会を奪うことに繋がる可能性も考えられる。そうならないためにもそれぞれの手法・技法の特性や留意点について十分に理解した上で幼児の発達段階に応じた指導を行うことが求められている。このために従来から採用されている技法・手法に加え、諸課題に対しどのような改善活動ができるのかについて検討する必要がある。そして諸問題を改善し子どもの発達を促す指導が行える保育者を養成することが今現場に求められているのではないだろうか。そこで、本研究では、この課題に対し、保育者養成校ではどのような取り組みが行われているのかに視点をあて、保育者養成校の取り組みについて分析し、保育者養成校の造形における授業展開の在り方や改善方策について検討することを目的とする。

方法

CiNii に収集されている保育者養成における造形表現（活動・遊び）に関する論文を「保育者養成」and「造形」で検索を行った結果、279 件の論文が検索結果に表示された。その中から、2001 年から現代までの保育者養成校における造形指導の新たな試みについて触れられている、機関リポジトリおよび学会掲載論文 10 件を分析する。なお、それぞれの論文の概要については、今回は省くこととし、保育者養成校の「取り組み」から教授法・指導法を検討する。

結果

林⁸⁾は造形への苦手意識と子どもたちの表現力の低下を課題とした上で「視野を広げる造形活動」を実践している。曲を聞き、その曲と描いた線、様々な感覚を意識しながら鉛筆での描画遊び（スクリブル）にはじまり、描画素材と曲を変え、表現を自由に楽しむことを主眼としている。スクリブルによる表現の次は見えないものをテー

マとした「音を絵にする」活動、最後に描いた画面を用いた立体造形を経て、表現の自由度を再確認し、経験値を増やし、絵に対する苦手意識の低減を目的とする活動を展開している。

智原・下口⁹⁾は授業科目の枠を超えた実践活動の取り組みとして、造形表現から身体表現への連携授業を実践している。造形の授業では、ダンボールによる「的当て用的」を作成する。ダンボールの特性や加工の手法について学んだ上で、保育教材としての相応しい「まと」を考察、作成し、身体表現の授業では発達段階を踏まえた投球動作の確認をし、造形表現で作成した「まと」を使って実際に意図したように動作するか動作確認も含めた学びの連続性がある横断的な授業展開となっている。

篠田・中島¹⁰⁾は素材の質感に着目し保育現場における土粘土を用いた表現技術指導を実践している。天日干しされた土粘土を砕き、固形物から粉へと質感の変化を確認させ、その後水を加えて造形素材としての粘土を準備するところから造形活動を展開している。次に「好きな食べ物」をテーマとした制作にシームレスに移行される。土粘土が着色できない弱みを活用して、表面の質感の違いで作品が区別できる力がつくように、終始「質感」をテーマに絞り一貫した指導方針により授業展開がなされている。

佐善⁷⁾は知的好奇心・造形的関心の喚起と造形への苦手意識を低減し造形的意識を良質なものにすべく、シルクスクリーン版画制作を用いたオリジナルのTシャツ作成において、シルクスクリーン版画の製版法を造形理論から体系的な指導が行われている。高度な手法のため入念な準備が必要となる内容においても事前に十分な検討がなされ、学生に創造の喜びや作品制作の充実感が得られる授業が行われている。

斎藤¹¹⁾は、絵の表現内容に相応しい環境や材料、相応しい指導と助言による効果的な指導法に着目し、観察画：静物画・風景画・人物画／想像画：想定画・体験画・印象画・漫画／空想画：遊び画・幻想画・心象画・物語画／構成画：抽象画・装飾画・デザイン画の各特徴を考察した上で、学生に5歳児の描いた絵を模写させテーマと内容による違いを、体験から意識させる試みがなされている。

佐善¹²⁾は新奇な素材を活用し、触れたことのない素材に触れることにより、学生は作ることの楽しみや喜びが体験できる。本来造形活動が持っている創作に関する魅力について、シルバーリングの作成を通し授業展開している。

佐善¹³⁾は「切り絵」「染め絵」を融合した従来の一工程完結型にとどまらない発展的な授業試案を提示した。日本古来の「紋きり遊び」を通じ文化や歴史的な側面に触れ、また、窓ガラスに貼って展示するなど、造形活動における指導以外の要素についても検討がなされ、創造に対する柔軟性を培える授業展開となっている。

大岩・本山・影山・麓¹⁴⁾は表現領域である、音楽表現・造形表現・身体表現共通の

テーマで科目別にローテーションすることで横断的に授業実践している。例えば「春」がキーワードの場合、音楽の領域では春をイメージした楽曲や楽器を選定し、演奏する。造形では春をイメージした絵を制作し、身体では体を使って春のイメージを表現する。何を奏で、造り、演じるかについてチーム内で十分な議論の時間が設けられ、学生は授業の進捗が後半になるにつれて学びの連続性や関連性に気づき保育者としての力をつけることができる。各専門分野の担当間の情報連携や授業の計画、実践後の振り返りと反省など緻密さが求められる授業実践を行っている。

石森¹⁵⁾は自然との関わりの薄れと、学生自身が身近な環境へ目を向ける意識の低下に着目し、自然素材を用い、身近な環境に目を向ける試みを行っている。「雑草に出会う」をテーマに、学生が子ども達の目線に立って様々な感覚を研ぎ澄ませ、全てを含めて雑草と向き合う。葉の先から根の部分まで、触った感触や、においなどを確かめ、虫眼鏡を使ってよく観察した後、描き、どのような気づきがあったかを振り返る授業展開を行っている。学生は葉の先端の鋭さや、花や実の美しさ、根の力強さなどに気づくことで雑草そのものに対する意識の変化も多く見られた。

鳥越・吉田¹⁶⁾は造形の授業中のつまずきの原因や、失敗の種類を検討し、学生が主体的に学ぶ姿勢となる授業の在り方を模索している。造形活動で使用される道具に関する知識や色彩体験、美術以外の好きな教科についても調査が行われ、造形領域の学びから一歩踏み出して造形表現の授業における問題解決のため、何をすべきかを考える手がかりを模索する授業展開がなされている。

これら授業実践例より「課題」と「授業実践内容・取り組み」を抽出し以下に示す。

(表 1)

表 1 造形表現の授業に関する課題および授業実践内容・取り組み

No	実施者	課題	授業実践内容・取り組み
1	林	表現力の低下を改善／造形への苦手意識の低減	視野を広げる造形活動／不可視なものを可視化する／制作に継続的な発展性を持たせる／指導者自身の「視野を広げる」造形活動を実施
2	智原ほか	他の領域と比較した際造形が独立化している／学びの連続性や連携の強化	授業科目の枠を越えた科目連携／身体表現と連動した授業展開／実際に作ったものを使用して授業を進めていく
3	篠田ほか	原料・素材に対する関心を高める／様々な素材との出会いを通じた経験を深める	土を細かく砕き、水と合わせ素材としての粘土を制作するところから授業展開する／粘土の特性を利用し、着色せず質感のみで表現する試み
4	佐善	知的好奇心・造形的関心の喚起／造形への苦手意識払拭	シルクスクリーンを用いた T シェツの制作／展示会を行って客観的評価を得る／入念な準備・丁寧な言葉かけ
5	斎藤	表現内容に相応しい環境や材料の準備／表現内容に応じた相応しい指導・助言	学生に子どもの描いた絵を模写させる／観察画：静物画・風景画・人物画など表現内容を意識する／テーマと内容による違いを、体験から意識させる試み
6	佐善	新奇な素材の活用し興味・関心を高める／造形本来の楽しさを追求する	シルバーリングの制作／触れたことのない素材に触れる体験／身につけるものを制作する
7	佐善	造形に対する興味・関心を高める	「切り絵」「染め絵」を融合／窓ガラスに貼って展示／授業を通じ文化や歴史的な側面に触れる
8	大岩ほか	造形が独立化しているため横断的な授業を展開する試み／学びの連続性	音楽表現・造形表現・身体表現共通のテーマで科目別にローテーション
9	石森	自然との関わりの薄れ／自然への興味・関心の低下／観察力の衰え	身近な環境へ目を向ける／自然素材を使用する／虫眼鏡を使って草花を十分に観察した後に描写する
10	鳥越ほか	造形の授業中のつまずきの原因や、失敗の種類を調査・検討する	調査を授業の一環として実施／造形活動で使われる道具に関する知識や色彩体験、美術以外の好きな教科についても調査・検討

課題の項目についてグルーピング^{注1)}を行ったところ、No.1、No.4とNo.10は造形表現（活動・遊び）に関する苦手意識や、つまずきに視点を当てた改善活動であるところから「弱点補強型」に分類された。No.2とNo.8は表現領域の中、造形が独立していることを課題として挙げており、他領域との連携を試みる取り組みをしているところから「連携強化型」に分類された。No.3とNo.9は自然との関わりの薄れを課題とし、原料・素材を観察し関心をもたせることを目的としているところから「自然体験型」に分類された。No.5、No.6とNo.7は普段授業を展開する中で明らかな問題が起こっているという訳ではなく、あくまでも授業実践内容の質を向上させることが目的であることから「改善改良型」に分類された。次に「実践内容・取り組み」についてグルーピングを行ったところ、No.1、No.3とNo.9は造形として視野を広げる活動や、土や草花など身近な環境へ目を向け、よく見るところから「観察活動」に分類された。No.2、No.8とNo.10は授業の枠を越えつつ科目間の関わりを捉えたり、美術以外で好きな科目を検討したりすることで造形を外側から見つめ意識をすることから「客観的考察」に分類された。No.4とNo.6は普段造形では取り扱うことが珍しいTシャツやシルバリングを用いた授業展開を行っているところから、「新奇体験」に分類された。No.5とNo.7は制作した内容を展示し、お互いの作品を見ることで刺激を与え合うことが特徴的であるところから「他者評価」に分類された。

考察

今回の文献調査は造形表現（活動・遊び）において保育者養成校ではどのような取り組みが行われているのかに視点をあて、保育者養成校の取り組みについて分析し、授業改善に向けて検討するためのものであった。

先行研究から読み取れる課題としては音楽表現や身体表現などの他の表現領域の科目と比較した際、他領域と造形が交わることが少なく、やや独立した位置に属していることが垣間見えた。これは学生が、一から独力で作成し各々固有の表現が求められる部分において他教科と異なるからであると考えられ、造形表現特有の特徴であると言える。また、学生のモノに対する観察力や興味関心、教具・道具に対する経験値が減少傾向にあることがわかった。自身も演習中に巡回する中、使ったことのない道具の使用方法に悩む学生を何度も見た。これは若者が成長してゆく過程で取り巻く環境が今と昔とで大きく異なっている点も無視できない。都市化による遊び場所が減少し、自然から成功や失敗を体験ができる場所が少なく、生活や学校における人との関わり方や遊び方など、どこにその原因が潜んでいるのかを明らかにする必要があると考えられる。また、学生の造形表現に対する苦手意識が増加傾向であるということも見て

取れた。グルーピングについては No.2 と No.8 や、No.3 と No.9 などのように「課題」の分類項目に対して「授業実践内容・取り組み」が一致しているものが複数見られた。授業実践を行った結果、一定の効果があつたことから妥当な「授業実践内容・取り組み」が行われていることが見て取れた。一方で「弱点補強型」のみ「観察活動」「新奇体験」「客観的考察」と、「授業実践内容・取り組み」との不整合が生じているように見受けられた。理由の一つとして起こっている個々の問題とその捉え方に違いがあることは言うまでもないが、それよりも何が原因で苦手となったり、苦手意識を持つことになったりしたかについて明らかとなっていない部分があることは無視できない。この苦手意識について原因や傾向がより明らかとなれば、明確なアプローチが可能となり効果的な授業実践と取り組みの改善が期待できよう。今後苦手意識について検討を進めたい。そのほかの改善策として、先行研究では様々な手法・技法を活用し、時に組み合わせたり、他領域と合同にしたりするなど、どれも学生の興味関心を刺激する改善策であった。また、改善案はどれも保育所保育指針に沿った検討と計画がなされている点で共通していることが浮かび上がった。

おわりに

今回の文献調査において、数々の授業改善における有効な実践例を検討することができた。先行研究からもわかるように興味関心の薄れや、観察力の低下を改善し、他領域と連携し積極的な発表を行うことで学生にとって授業から受ける刺激は今以上に豊かなものになるよう、改善を進めて行きたい。情報過多の現代では学生は新奇な体験ができる機会自体、少なくなっているが、学生を取り巻く周囲の環境が変わったのであればそれに合わせた学びの方向性も検討する余地があり教員にも柔軟性が求められると考えられる。新しいことをする上で、これまでの歴史的観点からの手法や技法の上に今が成り立っていることから、手法・技法は蔑ろにはできない。しかし、現場で取り扱っていない教具や教材を延々と学んでも、現代に求められる保育者像から離れてしまう。需要があつてこそその供給というのであれば、そうならないように新たな方式を検討することが必要となってくる。造形において今がその転換期にあるのかもしれない。今回の文献調査では見つけることができなかったが、時代に合わせ、造形×ICT などといった、先進的な技術を取り入れ、IoT や、AI・AR・VR などを取り入れることで幼児は造形だけでなくプログラムについても学べるような教育活動が実現するかもしれない。また、保育所保育指針の記載内容を前提として、例えばフィンガーペインティングに食品を用い、味覚にも刺激を与えられるような取り組みにアレンジしたり、バチックを厚紙で製作し、切り貼りして組み合わせ、立体造形に発展させ

たり、自分たちで収集した木の実や草木で染料を作り、その染料を用いたドリップングや吹き流しを行ったり、着色した板などに薄い粘土をはって、それをスクラッチしたり、ローリング・スパッタリングを用い、切り絵に発展させたり、音などの見えないものをデカルコマニーや糸引き・マーブリングで表現を試みたりなど、これらを他領域と組み合わせて造形の枠から出ることも視野に入れた授業改善を試みても良いのではないだろうか。そうなれば現代の若者にとって造形は教育的な価値に加え、さらに新奇でワクワクできる内容となるかもしれない。

今後の課題は、先行研究に見られる手法を参考にし、学生が造形において創る楽しさをより多く味わうことのできる授業を模索しつつ、学生や造形活動に対して抱く苦手意識について検討することである。

引用文献

- 1) 文部科学省.(2018) 幼稚園教育要領
- 2) 厚生労働省.(2018) 保育所保育指針
- 3) 若杉 雅夫.(1998).幼児の絵の発達段階とその援助と指導について.東海女子短期大学紀要,24,147-157.
- 4) 岩田 健一郎.(1993).幼児版画のオートマティスム性についての考察.近畿大学豊岡短期大学 紀要,21,83-94.
- 5) 金山 和彦.(2001).伝統的プログラム:技法あそびの実践状況について(保育者への質問紙調査をもとに).新見公立短期大学紀要,22,123-126.
- 6) 松下 明生.(2015).幼児の造形活動と小学校図画工作科の内容分析 : 文部科学省検定済教科書に見る幼児課題との同一性と教育内容の変遷.名古屋柳城短期大学,37,75-86.
- 7) 佐善 圭.(2011).保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果(3)シルクスクリーン版画制作を導入した造形指導の実践的研究.岡崎女子短期大学研究紀要,45,41-52.
- 8) 林 有紀.(2013).教育研究活動報告 視野を広げる造形活動 : 教育現場における造形指導の工夫についての実践報告.京都文教短期大学研究紀要,52,209-215.
- 9) 智原 江美・下口 美帆.(2012).大学における科目を連携させた授業の取り組み : 「図画工作」と「幼児体育」の授業実践報告(3).京都光華女子大学短期大学部研究紀要,50,67-85.
- 10) 篠田 美里・中島 法晃.(2012).保育者養成における表現技術指導の事例と考察 : 幼児音楽 基礎技能から保育の表現技術への転換事例と考察 幼児美術 粘土造形

表現活動の事例と考察.東海学院大学短期大学部紀要,38,57-65.

- 11) 斎藤 久六.(2008).保育者養成における「図画工作科指導の基本的条件」絵のテーマによる指導の違い.尚絅学院大学紀要,56,185-194.
- 12) 佐善 圭.(2010).保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果(2)シルバーリング制作を導入した造形指導の実践的研究.岡崎女子短期大学 研究紀要,44,23-33.
- 13) 佐善 圭.(2009).保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果 切り紙、染め紙を活用した造形指導の実践的研究.岡崎女子短期大学 研究紀要,43,31-40.
- 14) 大岩 みちの・本山 益子・影山 捷司・麓 洋介.(2005).表現する者の養成のために保育内容「表現」の授業への取り組みから.岡崎女子短期大学 研究紀要,39,97-107.
- 15) 石森 由理.(2006).保育者養成における表現(造形)の授業の一展開(2)雑草との出会いを通して.千葉敬愛短期大学紀要,28,205-211.
- 16) 鳥越 亜矢.(2001).授業科目「表現 IIA」における学びの実態から授業改造を考える : 授業中のつまずき、失敗が示すもの.山陽学園短期大学紀要,32,45-68.

注釈

注 1) KJ 法の「グループ編成」を指す。今回、図解化や文章化を用いなかったため、「KJ 法」とは記載せず、「グルーピング」としている。

